中国新聞　　2007/7/14(土)

ひろしま 歴史回廊

第10部・厳島の文化④

土曜日に掲載します

康頼灯籠と卒都婆石　熊野との関係が重要

厳島神社には康頼灯籠と呼ばれる古い石灯籠がある。その直下の座辺には、卒都婆石と呼ばれる岩がある。説明の看板もあり、本殿手前の回廊から見ることができる。

■奇異に思える漂着

〈平判官康頼は、平氏打倒を企てた鹿ヶ谷の謀議に連座し、俊寛僧都・丹波の少将成経とともに鬼界が島に流された。康頼と成経は島に熊野神社を勧請し、日夜参拝した。康頼は望郷の和歌二首を書いた千本の卒都婆を作り、一本でも都に届けと熊野権現、厳島明神に祈誓し、海に流した。

康頼に縁ある僧が鬼界が島へと旅に出た。途中、厳島に立ち寄り神前に詣でると、岸辺に一本の卒都婆を見づけ、都に持ち帰った。都では康頼の和歌に人々が感動し、清盛も憐れんだ。康頼と成経は、後に大赦で都に戻ることができた〉

以上が「平家物語」の卒都婆流しの話だ。康頼灯籠は、康頼が御礼に厳島神社に奉納したものと伝えられ、卒都婆石の伝承も生まれた。しかし、内海の厳島への卒都婆漂着は少し奇異に思える。

この物語では、熊野と厳島の関係が重要だ。ともに世界の中心とされる須弥山の略称・弥山を仰ぐ信仰の拠点である。「平家物語」では、清盛の熊野詣での折、船に鹿が飛び込んだのを平氏繁栄の前兆とする。厳島はむろん平家の氏神的存在である。

■双方結ぶ蓬莱伝説

両者を関係づけるものとして蓬莱伝説がある。秦の始皇帝の命で徐福が童男童女と共に不老不死の薬を求めて蓬莱を目指して東海のかなたに消えたという伝説は、日本各地に蓬莱伝承地を生んだ。熊野、熱田、富士山は有名だ。

鎌倉時代の天台僧が記した「渓嵐拾葉集」では、厳島の須弥山に蓬莱宮門という石門があり、厳島の本尊を不老不死の薬を与える薬師如来だとする。

今も宮島北東端の聖崎の先にある小島を蓬莱島と呼ぶが、かつては厳島全体が蓬莱だと信じられていた。徐福も卒都婆も、同じ潮流に運ばれたのだ。

（樹下文隆・県立広島大教授）

厳島神社の回廊から望める康頼灯籠